

あいさつ

大 田 堯

みなさん、多くの方が…。こんなにたくさん仲間たちがいてくれるのが、涙が出るというか、嬉しいですよ、とにかく、とても嬉しい。しかし、山根（基世）さんの素晴らしい演出の直後というのは、本当に分が悪いなあ。不細工な話で終わってしまうのではないかと存じますが、99歳という歳をふまえてお許しを得たいと思っております。座ってお話をするをお許し願います。

『ごんぎつね』の語りという、山根さんの実演をとても素晴らしい印象でもって私は伺いました。人間の情念の奥底に響いてくるような、そういう『ごんぎつね』の話というもの、文学というものに、本当にみなさん染み入るような情感でお受け取りくださったと想像いたします。地域の言葉、方言まで使われまして、あの作品をお読みいただいたということもまた、『地域の中で教育を問う』という、私の今度の出版とも重なりまして、大変うれしく存ずる次第でございます。

宮本さん、いらっしゃいますか？ 後ろにいらっしゃる「太陽の家」の宮本さんという方は、いわゆる重い障がい、どんな障がいでも全部受け入れるという、そういう稀な施設ではありますけれども、その工房で障がい者の方が仕事をなさる場面のお世話をなさっています。午前の映画がすんだあとで、宮本さんから2、3分お話をいただいたと思いますが、この施設というのは、みんな仲間なんです。つまり所長をはじめとして、全部仲間なんです。そういう仲間という状況の中で、彼女は背の高い、重い障がい者の方の隣で、カメラを前にして「ここにいる人たちはみんなつらい仕事をがまんしてできない人たちなんです」と、公然と表現したわけです。そのとき私ははちよっとドキッとしたんですけど、考えると「ああ、彼女は障がい者の気持ちになって、私どもに語りかけているなあ」ということがよくわかりました。

（彼らは）確かにできない、確かにできないんですよ。しかし、ある意味ですべての人間は、完全な

人間は一人もいないと思うんですよ。どこかでできないことが、みんなあるわけなんです。そのできないことのひとつが障がい者の方々の状態でありますけれども、障がいというものを、全人間の基本的人権とむすびつけて発した言葉ではないかと、私は思うのです。そういう基本的人権にふれるニュアンスを含んだ、宮本さんの表現そのものに、私は深い感動を覚えたのであります。

今日の社会というものが、どんなに困難な問題をたくさん抱えているかを、ここにいる仲間たちは、みんな知っているはずですよ。並々ではない社会状態だと思っています。テロがあり、何も理由がないのに何人もの人を殺すという、今までであったこともないような事件もあります。そういう人間関係の現状を象徴するような出来事から、私は大変な時代だと思わざるを得ないわけです。

そういう社会をあとにして、この世を去るのは大変申し訳ないことで、責任をみなさんにお任せすることにもなるので、これは悪いなあと思っております。しかし、時がくれば死ななくてはなりませんから、事前にみなさんに会っておいて、お会いしておけば、それでとにかくご挨拶をしたことになるのではないかという思いで、出版を契機として、このような集まりをやらせていただきました。

私はモノ・カネではなくて、人間関係に問題があると思うんですよ。モノ・カネが先行してしまっ



人間というものがみなそれに依存してしまっ、何も無理しなくても、お金を出せばすぐ何とかなるといような状態です。一方で今度は貧富の格差も大変明瞭に出てきている。孤独であり、格差がある。孤独化社会であると同時に格差社会でもあるという、こんな攻め方で人間関係が侵されれば、当然今までにない事態が起こっても少しも不思議はないのではないかと、私は思っているのでございます。

長い時間みなさま方に延々とお話を申し上げるつもりは全くございませんけれども、簡単に申し上げますならば、先ほど申し上げました事件の背景の中には、やらせ社会、やらされ社会というものがあります。つまり自分自身の持ち味で自分の仕事をやっているというよりも、どこかでやらされているというのが、今の社会の労働の状態ではないですか。労働者が自分の好きなことで自分を生かしている、こういう確信をもっているのでしょうか。「雇われている」ということ、「雇用」ということが当たり前になっています。雇用なんて当然じゃないかと思ひこんでいますけれど、私はそうは思わない。「雇われている」という状態の中では、なかなか自分自身の好きなことを表現するということがむずかしいじゃありませんか。自分の好きなことで仕事を選んで、その好きなことで社会的に意味のある仕事ができる。これが一番よい状態ではないか、と私は思うのです。

一ころよく 我にはたらく仕事あれ それを仕遂げて死なむと思ふ一石川啄木のこの歌は、多くの人々が実は心の中で大変期待をしていることだと思うんですが、実際はやらされ社会に住んでいるのが事実ではないかと思うのです。

私が研究の対象といたしました、教育の世界についていいましても、学校では「やらせ」という形の

学習が行われている。あらゆる生きものが学習によって自ら変わって発達している。そういう生きものの特徴中の特徴は“自ら変わる”ということです。自ら学習することで大人になるということなんです。そうであるけれど、学校教育の中で子ども自身が自分というものを思い、自分の良さを見つけるように教師が励ましてくれているかという、そうはいかない状況だというのが、私の心配しているところです。

教育という状況の中でこそ、自分というものが見えてくる、そして見えた自分に合うような仕事につける。自分の好きなことをとおして仕事ができ、それが社会的意味のある仕事になる。一ころよく 我にはたらく仕事あれ それを仕遂げて死なむと思ふ一という満足の極致というものを、啄木は教えてくれているのではないかと思うのです。

しかし、こんな社会の中でも、今私の前に玉木さんがお話をくださった、あの労働者協同組合というのは、資本を自分たちでつくって、自分たちで新しい仕事を探し、新しい仕事を発見し、仕事のない人にそれを提供している。「雇われる」のではなく、自らの好みに応じて仕事をしている、労働している。労働をとおしての芸術性、人間になる。そういうことを目指しているグループもいるんですよ。そのほか、有機農業をなさり、生活を有機化しようと努力していらっしゃる方々もいます。ですから、私は悲観ばかりはしておりませんが、今、芽を出そうとしている労働者協同組合にしても、また有機農業にしても、我々の仲間たちが、これを助けていく、つないで支えていく。そして私ども自身のあいだでも身近な人間関係をつくるよう、挨拶を交わすことから励んでみる。そういう試みを毎日の生活の中に実現してみたらどうだろうか、と思うのです。



むずかしいことではないんですよ、やり方としては。たとえば今日の会に何名の人が参加を希望していますなどおっしゃる方があると、人数ではなくどなたが参加されるのかを知らせてくださいと、そういうふうにお名前をいただいて、一人ひとりの人格を大事にしました。ですから、今日ここに来られた方の大部分はちゃんとお名前をいただいた方がほとんどだと、私は思うんです。だから仲間なんです。

今日はこんなに盛大ですけれども、身近なところでいいから、数人でいいから、「かすかな光へ」をみてもらうということをやりに始めて、全国で600か所くらいになったのでしょうか。小さいグループでみてもらい、あとで感想を交換し合うということをやって、そこでお互いが知り合う。新しい知り合いをつくるということ、私どもの運動としてやってきました。その一環がこの会なんです。

こんなにたくさん集まられるとは思わなかったんですよ。いっぱいになってしまっ、どうお断りしようかと。まあ、よくぞみなさんおいでくださいまして、ありがとうございます。みなさんは本当の仲間です。ありがとうございます。

99歳ということは、みなさんご承知のとおり、まもなく死がやってくるということもちゃんと理解をしているつもりです。そういう状況の中で、みなさんのような仲間と今後もお付き合いをするということは、将来必ずしも期待をすることはできません。今日はそのためにみなさんとお会いしておく、なんとしても顔を見合って挨拶をしておきたいということでやってきたんです。そういう立場で、ここでお話を申し上げておりますが、この辺でさようならということにしたいと存じます。ありがとうございます。

二〇一七年十一月四日